

まずは日本語で書くべきか、はじめから英語で書くべきか？ 研究論文を執筆する言語を決定する



今日、世界的な関心を集める多くの分野において、学術出版に使用される第一言語は英語です。とはいえものの、分野によっては英語以外の言語が推奨されていることもあり、例えば、数理解析における重要な言語は未だにフランス語ですし、最先端のサイバーセキュリティー研究がロシア語で書かれていることもあります。また、英語圏外における国内／地域内ジャーナルや学会の多くは、当該国／当該地域の言語で論文を出版しています。そう考えると、母国語が何であるかに関わらず、全ての研究者には、母国語以外の言語で論文を発表する機会が、キャリアのどこかで訪れる可能性があるわけです。

ThinkSCIENCEのお客様で、英語での出版／発表を考える英語を母国語としない研究者の方から、「**研究論文は、まず母国語で書いた方が良いでしょうか、それとも最初から英語で書いた方がいいのでしょうか**」という質問をよく受けます。

これは非常に的を射た質問です。そこで、ここでは、どちらの言語で原稿を書き始めるかを決定する際に考慮すべき二つの重

要事項と、関連する様々な因子について考察します。日本の研究者が英語で執筆する場合に重点がおかれていますが、ここでの考察は、他の言語のペアにも同様に応用することができます。

1. 原稿は、まず母国語(例:日本語)で書くべきでしょうか、それとも目標言語(例:英語)で書くべきでしょうか？
2. 母国語で書いた原稿を翻訳してもらうのではなく、目標言語で直接論文を執筆するのに十分な語学力があるかどうか、どのように判断すればよいでしょうか？

この二つの質問への回答は、研究者の語学力や執筆に費やせる時間に加え、対象となる言語の特徴に大きく影響されます。

1) 原稿は、まず母国語(例:日本語)で書くべきでしょうか、それとも目標言語(例:英語)で書くべきでしょうか？

日本語で書き、それを英語へ翻訳する

日本語と英語には、単に単語や文法が異なるということ以上の違いがあります。例として、「論理的な流れ」についてみてみましょう。

日本語での論証における従来の「論理的な流れ」は、英語におけるそれとは異なります。日本語を母国語とする著者が文章を書く場合、自然と、日本語での「論理的な流れ」を使ってしまうため、個々のポイントや事実をまず述べ、パラグラフの最後でそれらを明確に結びつけるというスタイルになりがちです。

それに対し、英語を母国語とする著者が文章を書く場合、各パラグラフにおけるメッセージの主題を述べる主題文「トピックセンテンス(または、フォーカスセンテンス)」でパラグラフを始め、それを支持する、または否定するエビデンスを付け加える文章を繋げるスタイルとなります。

このような違いのため、日本語で書かれた論文に日本語の「論理的な流れ」が残ったまま英語に翻訳されると、その英文の構成は、英語を母国語とする読者を混乱させることとなります。パラグラフの始まりで明確な誘導がないため、最終的に各々の文章がどのように結びつくのか想像しながら読むことが強いられるからです。最後に置かれるまとめの文章は、ちょっとした「不意打ち(驚き)」のように受け取られます。英語を母国語とする読者は、このような流れを通常の研究報告文献で目にすることに慣れていません。

もちろん、このことは、どちらのスタイルが本質的により優れているかということではなく、単に、読者が慣れているのはどちらかという問題にすぎません。しかしながら、これは、英語に堪能な日本人研究者でさえも、自分が書いた英語文書は、ネイティブが書く文書と違うことに気づきにくいということを意味します。また、英語を母国語とする研究者が日本語で執筆する場合も、出来上がった文章の構成と日本語ネイティブの読者が想定する構成とのミスマッチという、同様の問題が起こることとなります。

翻訳をする場合に、このことはどのような意味を持つのでしょうか？

翻訳チームを使う:「論理的な流れ」の違いはもとより、2か国語間に存在するその他多くの違いを理解している翻訳チームに翻訳を任せるならば、単なる翻訳文ではなく、ターゲット言語としてより自然な文体を使い、「論理的な流れ」が調整された翻訳原稿に仕上げることが可能です。皆さんがそのような翻訳チームをご存知でしたら、はじめから自分の母国語で書くことに何の問題もないでしょう。

しかしながら、多くの翻訳者は、起点言語の論理的な流れを、英語として自然な構成に変えることはしません。これは、エディター(校正者)の役割です。ThinkSCIENCEでは、まず、専門分野の翻訳者が、起点言語の原文の論理的構成を調整することなく目標言語へと翻訳します。それを、専門分野のエディターが、論理的構成やその他の側面を、目標言語の学術ライティングのスタイルと一致するように、調整します。私たちの[翻訳サービス](#)をご利用になる際には、翻訳のみ(ドラフト翻訳)を希望するのか、翻訳と校正の両方(スタンダード翻訳)を希望するかをお伝えください。

自分自身で翻訳する:日本語で作成した原稿を自身で翻訳する場合は、先ほど述べた校正段階での調整作業も自身で行うか、または最終的な翻訳文書が目標言語の文書として自然なものとなるように、包括的な校正(リライト)を専門エディターに依頼する必要があります。

ライティングの慣習は言語間で異なるばかりでなく、研究分野においても異なるため、専門分野のスペシャリストエディターに校正を依頼することをお勧めします。一般のエディターは、皆さんの専門分野におけるライティングの慣習を必ずしも理解しているわけではありません。

(2) 母国語で書いた原稿を翻訳してもらうのではなく、目標言語で直接論文を執筆するのに十分な語学力があるか、どのように判断すればよいのでしょうか？

始めから英語で書く

英語が母国語ではないが、文章間のつながりを表現するのに十分な英語能力があり、かつ、執筆に費やせる十分な時間がある場合は、初めから英語で論文を書くことは良い考えだと思われます。英語的な論理の流れが使われ、母語言語からの「直訳」も少ないでしょう。

[自然な英語を書くための詳しい情報とヒント](#)については、1月の特集をご覧ください。

原稿は投稿前に校正を受けるべきでしょうか？

同じ文章中、または文章をまたいで、ある概念と別の概念の関連性を表現するのに十分な文法能力があるならば、あなたの科学的なメッセージは理解されるはずですが、入念な見直しと校正が終わり、自分のメッセージは査読者に理解されるレベルに

達したと確信できれば、つまり、査読者が、あなたの主要なメッセージとそれを支持するエビデンスに余計な時間を費やすことなく、また難なく理解できるような原稿が出来上がったのなら、文法的な間違いが少しばかりあったとしても、その原稿は投稿してよいレベルであると判断してよいでしょう。

ジャーナルのエディターが、あなたの論文を(マイナーなエラーがあるとしても)理解できるならば、通常、その論文は査読者に送られます。査読者は、論文に書かれている科学的内容が明確に理解できるものである限り、査読を行います。その後に、語学的なエラーを再投稿の前に訂正するように指示があるかもしれません。ここで大切なのは、ジャーナルエディター、査読者のどちらも、著者のメッセージを読みとるのに、余分な手間がかからないということです。

したがって、ここでの要点となるのは、**査読者があなたの英語を難なく理解することができるか**ということです。もし、理解されないかもしれないと思うならば、英語の得意な同僚や、専門領域のネイティブの校正者に依頼して、より明確な原稿に整えてから投稿を考えた方が良いでしょう。

査読者のコメントに従って論文を修正する必要がある場合、少なくとも修正前のレベルを保った原稿を作成する必要があります。ですから、修正後の原稿を見直す際にも、英語の校正が必要かを自問し、英語ネイティブの同僚、または専門分野のネイティブの校正者へ校正依頼をする必要があるかどうかを判断しましょう。

ジャーナルがコピーエディティングのサービスを提供しており、受理された論文中の語学的エラーや、規定スタイルとの不一致などを修正する機会があるかどうかも考慮すべきです。PLOS ONEなどのように、コピーエディティングをしないジャーナルもあります。そのようなジャーナルへの投稿をお考えの場合は、修正後の原稿を再投稿する前に、[包括的な校正か、プルーフリーディング](#)を受けることをお勧めします。

これまで述べてきたことと同じくらい重要なこととして、執筆に使える時間についても述べたいと思います。時間が限られている場合、優れたライターによる原稿でさえもエラーを含みます。母国語ではない言語で執筆したものであれば、この傾向はより顕著になります。

時間に余裕がない場合には、限られた時間内で急いで、おそらく明確さを犠牲にして英語で書くか、科学的なメッセージを正確かつ明確に日本語で説明するか、どちらが良いかを考えましょう。英語の校正が必要(または不必要)か、あるいは日本語から英語への翻訳が必要かは、自身のスケジュール等も踏まえた上で、著者自身で判断することになります。

私たちがご提供している**EXPRESS**サービスをご利用いただくと、非常に専門的な内容のご依頼に、私たちの翻訳・校正チームが短時間で対応することも可能です。ご自身で判断しかねる場合は、私たちがお客様の状況に最も適した解決策を見つけるお手伝いをしますので、ぜひご相談ください。

両戦略を使用: 母国語と目標言語の両方で書く

母国語(例: 日本語)と目標言語(例: 英語)の両方を組み合わせて書きたいという場合もあるでしょう。このような場合には、単一原稿中の翻訳箇所と校正箇所の両方に対応する組み合わせサービスをご利用いただけます。

例1: 校正をした英語論文を投稿した後、今度はその修正論文を急いで作成して再投稿しなければならない場合、お客様が新規追加部分を日本語で書き、それを私たちのチームが翻訳し、既存の内容に対して論理的な一貫性と、整合性をもつように論文全体を校正します。

例2: 新規論文を英語で書いている途中で時間が足りないことに気づき、残りは日本語で書いて論文を完成させた場合、私たちのチームが、英語で書かれた部分に対しては、必要となる校正の程度に応じて、包括的な校正またはプルーフリーディングを行い、日本語部分は、翻訳後、論理的な一貫性と、整合性をもつように、英語部分につなげます。

まとめ

論文を投稿する前に、他の人に目を通してもらうことは、たとえ母国語で論文を書く場合でも有意義なことです。ましてや、外国語で論文を書く場合、これは非常に重要なステップとなります。母国語で書いて翻訳を依頼するか、外国語で書いて注意深くチェックしてもらうかは、個人の選択ですが、ここまで述べてきた事項を考慮することで、自身の語学能力と出版目標に照らし合わせた最善の選択ができるのではないかと思います。

今回の特集記事について、またその他の出版に関する個別のアドバイスが必要なお客様は、[こちら](#)よりお問い合わせください。